

すると戸のすきまから入って来たのは、一匹の野ねずみでした。そして大変小さな子供をつれて、ちょろちょろとゴーシュの前へ歩いてきました。そのまた野ねずみの子供ときたら、まるで消しゴムくらいの大きさしかないので、ゴーシュは思わず笑ってしまいました。すると野ねずみは何を笑われたのだらうというようにキョロキョロしながら、ゴーシュの前に来て、青い栗の実を一粒、前において丁寧にお辞儀をして、言いました。「先生、この子の具合が悪くて死にそうなのでございます。先生、直してやってくださいまし。」

「オレは医者じゃないんだ。そんな

ことが出来るか。」ゴーシュは少しムツとして言いました。すると野ねずみのお母さんは、下を向いてしばらく黙っていましたが、また思い切ったように言いました。「先生、それはウソでございます。先生は毎日あんなに上手にみんなの病気を直しておいでになるではありませんか」

「何のことだか、サッパリわからんね。」「だって先生、先生のおかげで、うさぎさんのおばあさんも直りましたし、たぬきさんのお父さんも直りましたし、あんな意地悪のみみずくまで直していただいたのに、この子ばかりお助けをいただけないとは、あんまり情けないこととござい

